

【暗証聖句】

「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」ヨハネによる福音書 12 章 24 節

【日・奉仕のための従順】

フィリピ2章4節に「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい」と書かれてあります。今は、何でも自分の権利を主張するような時代です。しかし、聖書は自分のことばかりでなく、時には自分の権利を放棄してでも、他人のことを考えなければならないと教えています。これはイエス様にもみられるものでした(フィリピ2章5節)。フィリピ2章6、7節に次のように書かれてあります。

「(イエス様は、)神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられたのです」(フィリピ2章6、7節)。

そして、どこまでも「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」(フィリピ2章8節)だったと続きます。なぜ、イエス様は人となり十字架の死に至るまで従順であられたのでしょうか。それは私たち一人ひとりを自分のこと以上に考え、ご自分の命にかえてでも救おうとされたからです。もし、イエス様が王の王、主の主としてのご自分に固執されたのであれば、人となって十字架におかかりになることはなかったことでしょう。ここに私たちの模範があるのです。

私たちが他者のために自分をささげるとき、神様は祝福をもって答えてくださいます。イエス様が人となり、十字架の死まで従順を貫かれたとき、神様は「キリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになった」(フィリピ2章9節)と書かれてあります。これと同様に、イエス様のように自分を完全に無にすることはできないかもしれませんが、み言葉にあるように、まず「他人のことに注意を払う」ことから心がけていくなら、神様はそのような人を喜んでくださり、高く引き上げてくださることでしょう。

【月・神の御心を知るために捨てるべきもの】

ローマの12章1、2節「こういふわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を養っていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」

パウロは、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」と言っています。そして、これこそ私たちがなすべき礼拝なのだと言います。先の「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払う」ことも、この自分の体を神様に捧げることの一部と言っても良いのではないかと思います。

では、自分自身を主に捧げるとは、具体的にどうすることを言うのでしょうか。サムエル記上15章22節に次のように書かれてあります。

「サムエルは言った。「主が喜ばれるのは焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり、」耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。」

主の御声に聞き従うこと、これこそ主が私たちに求めておられることであり、焼き尽くす献げ物以上に、私たち自身を主にささげることになるのです。そのためには心を新たにしておいて、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようにならなければなりません。その上でそれを実践していけるように、主に祈っていくことが大切です。主の御心を知り、それを生きる時、それはまさに自分自身を主にささげる生き方となっていくのです。

【火・喜んで聴くこと】

聖霊が心の内に語り掛ける声を自覚しながら、その声に耳をふさぎ、従わなかったために、後で後悔したことはないでしょうか。いろいろな理由をつけて、神様の声を無視してしまうことがあるのではないかと思います。そして、その理由も正当なものに思えます。しかし、私たちは今日の前にあることしかわかりませんが、すべてをご存じの神様は、先のそのまた先を見越しておられるのです。説教家のチャールズ・スタンリーは次のように語っています。

「聖霊は…聞き流すための情報は語らない。聖霊は応答を得るために語るのである。聖霊は私たちの関心事がいつ私たちの心を占拠するかを知っている。そんなときにそれとは相いれないことを語っても時間の無駄である。それで聖霊はしばしば沈黙をまもる。私たちの心が十分に中立になり、聞いて最後には従うのを待つのである」

幼いサムエルと主なる神様との会話が聖書に記されています。

サムエル記上3章10節「主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

これは預言者エリがサムエルに教えたことをその通りにしたのですが、「どうぞお話しください。僕は聞いております」。この

ような神様に対する基本姿勢がまず何よりも大切なのです。自分の思いではなく、主の思いを何よりも第一にする。だから、静まって主の声に耳を傾けるのです。「どうぞお話しください。僕は聞いております」と、私たちも主の御心を求めてこのように祈ってみると良いのではないのでしょうか。私たちの側に主の御声に聞き違う準備ができていれば、主は私たちに必要なことを語って下さることでしょう。

### 【水・自分を頼みとすること】

神様の声に耳を傾け、それに聞き従うことの反対は、自分を頼りにすることです。サムエル記上の 10 章に、預言者サムエルから頭に油を注がれ、イスラエルの最初の王となったサウルの物語が出てきますが、サウルはまさに自分を頼みにしていったがために神様から離れてしまった良い実例です。

最初サムエルはサウルに、「主の霊が激しく降ったら別人のようになり、しようと思うことは何でもしなさい。神があなたと共におられる」と告げます。何と神秘的で力に満ちた言葉でしょうか。そして、この告げられたことはすべてその日のうちに実現します。ところで、「しようと思うことは何でもしなさい」と言ったものの、制約が全くなかったわけではありませんでした。サムエルはサウルに次のように命じます。

**サムエル記上 10 章 8 節「わたしより先にギルガルに行きなさい。わたしもあなたのもとに行き、焼き尽くす献げ物と、和解の献げ物をささげましょう。わたしが着くまで七日間、待ってください。なすべきことを教えましょう。」**

この出来事は、サウルが王となって 2 年経ったときに起こります。ペリシテ人との間に闘いが起こったのですが、イスラエルの兵士三千人に対して、敵は戦車三万、騎兵六千、兵士は海辺の砂のようでした。「イスラエルの人々は、自分たちが苦境に陥り、一人一人に危険が迫っているのを見て、洞窟、岩の裂け目、岩陰、穴蔵、井戸などに身を隠した」とサムエル記上 13 章 6 節に書かれてあるほど、イスラエルは窮地に追い込まれていきます。サウルは、サムエルが命じたように、ギルガルで七日間サムエルを待ちます。しかし、七日たっても、サムエルはギルガルに来ないのです。すると、兵士たちは恐れをなして、サウルのもとから散り始めます。(サムエル記上 13 章 8 節)。そのためサウルはサムエルの到着を待たずに、自ら焼き尽くす献げ物を主にささげてしまうのです(サムエル記上 13 章 9 節)。これは神様のために正しいことのように思えました。しかし、やがてサムエルが得着すると、「あなたは何をしたのか」と問うのです。サウルはこう答えます。

**「兵士がわたしから離れて散って行くのが目に見えているのに、あなたは約束の日に来てくださらない。しかも、ペリシテ軍はミクマスに集結しているのです。ペリシテ軍がギルガルのわたしに向かって攻め下ろそうとしている。それなのに、わたしはまだ主に嘆願していないと思っただけで、わたしはあえて焼き尽くす献げ物をささげました。」**(サムエル記上 13 章 13, 14 節)

一見、正しいことをしているようですが、それは全部自分の判断でしたことでした。彼は遅れたとしてもサムエルを待つ、つまり神様の言葉を待つべきでした。サムエルはサウルに「あなたは愚かなことをした。あなたの神、主がお与えになった戒めを守っていれば、主はあなたの王権をイスラエルの上についていつまでも確かなものとしてくださったろうに。しかし、今となっては、あなたの王権は続かない。主は御心に適う人を求めて、その人を御自分の民の指導者として立てられる。主がお命じになったことをあなたが守らなかったからだ」(サムエル記上 13 章 13, 14 節)と告げるのでした。

サウルが自分で判断し、間違った行動に至った理由を、彼の言葉の中から読み取ることができます。サウルは、「兵士が去っていくのを見て、主に嘆願していないと思い、献げ物をささげた」と言っています。ここにサウル自身が「見る」「思う」「実行する」という言葉がでできます。どこにも神様が登場しません。自分に頼るか、主に頼るかは、このような危機的状況によって現れるものです。

### 【木・代わりのもの】

神様に対する従順は、自分に頼ることによって徐々に切り崩されていきます。また、自分に頼ること以外にも、この世の人や物に頼ることによっても同様に起こります。それらは一時的なプレッシャーからの解放にはなるかもしれませんが、根本的な解決にはなりません。バビロンから帰還した民が神殿を再建していくにあたって、リーダーだったゼルバベルを励ますために預言者ゼカリヤは次のような言葉を語ります。

**ゼカリヤ書 4 章 6 節「彼は答えて、わたしに言った。「これがゼルバベルに向けられた主の言葉である。武力によらず、権力によらず、ただわが霊によって、と万軍の主は言われる。」**

ゼカリヤは自分たちの能力を超えた働きに対して、自分の力に頼るなど教えています。そして、頼るべきは神様のみであることを教えています。このことを私たちは忘れがちです。神様はあえて自分たちの能力を超えた問題に直面させることで、力を捨て主に頼ることを私たちに学ばせるのです。